

---

# D I E G O

梢田 了

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DIEGO

### 【Nコード】

N0876I

### 【作者名】

梢田 了

### 【あらすじ】

人の脅威となる存在の排除、又は回収・封印する組織ガーディアンズ。その傘下にあるゾディアックは12人の戦闘要員を中心に組み込まれた組織である。その中の一人がガーディアンズにより命を受けてとある村へ向かった。

## （前書き）

グロテスクな要素があります。

弱い人は注意してください。

逆に期待してる人にはゴメンナサイ。そこまで強くはないと思います。

どれだけ走っただろう。荒い息が耳をくすぐる。

まるでひどく、出来の悪い悪夢に閉じ込められたような錯覚に、少女は泣きはしなかった。悪夢らしい悪夢で、だからこそ現実とは思えない。

窓のむこうは赤い月。街路に散った肉片の群れ。

（これは——夢だ……）

自分に言い聞かせ、長い廊下を右へと曲がった。息が乱れる。げらげらと楽しそうに笑う声——

廊下の奥で口を開く鉄製の扉。まるで巨大な口のように、彼女を誘う。

多少の恐怖がなかったと言えば、嘘になる。

しかし、すぐ後ろの“死”よりは、ましだと思ったのだ。駆け込むと同時に身をひるがえし、扉を閉じる。重い音が響き、同時に衝突音が扉を震わせた。

「……………！」

沈黙。が、それは一瞬のことで、鈍器で扉を叩くような音が鳴り渡った。それは連続し、少女は扉の前に机を移動させた。戸棚の本を、食器を。

（防がないと……防がないと……！）

死ぬ。

少女が花瓶を置こうとした瞬間、荷物が吹き飛んだ。粉々になった残骸は少女の小柄な体に降り注ぐ。

「——立てるか？」

なにが起きたのかわからず、尻を床につけたまま呆然とする少女へ声が注ぐ。

それは女のようなだった。逆光の中、長い髪は不自然にゆれ、騒々しい音がいびつな、長い両手から発せられている。そして、異様な

臭いが鼻をつく。

「……………」

少女は震えるのみ。それを見て女は溜息をついた。長い左手、いや、騒音と悪臭を撒き散らすそれを、床へ突き刺した。

少女の知る限り、まだ地震で傷ひとつついたことのない、この屋敷自慢の床が、事もなげに悲鳴をあげ、塵をばら撒く。

「立て。お前は怪我をしている、今のままだとすぐに狙われるぞ」

機械仕掛けの鋸を床へ突き刺し、空いた左手を少女に差し伸べる。

「あ、あなたは——？」

「私か？」

唸り声をあげるように、右手の回転刃が止まる。それを肩に乗せて、事もなげに言った。

「私の名前はディエゴだ。ガーディアンズ 守護者の下部組織、ゾディアックのハンターを務めている」

地面を踏むたびに、なにかの割れる音がする。燃える音がする。

——この村は、あまりにも死の臭いが充満していた。

「この村は——終わりだな」

「……………」

事もなげに漏らしたディエゴに、少女は非難の目を向けた。しかし、サングラスをかけコートを着飾った女は、こちらを見ようとさえしない。

「なにが起きたんだ？ これは奴らの被害と言うよりも、災害だ」

奴ら。少女は肩を震わせる。視線には気づかなかったが、その身震いには気づいたようだ。革製のコートを脱ぐと、少女に押しつける。

「着ている」

露出した、まさに色が抜けたようなディエゴの肌にも多少驚き、コ

ートを受け取ってしまう。そこら中が燃えているのだ、寒くはない。少女は腕に巻くようにして、それを抱いた。まだ、体が震えている。

「……なんなんです、か……？」

「ん？」

コートの下に着ていたジャケットを正しながら、少女を見下ろす。コートに顔を埋めるようにしていた少女は、すぐに顔を上げて言った。

「なんなんですか、あれはっ」

目に涙を浮かべ、その表情は見る者へ悲愴な気持ちを与えずにはいられなかった。

「……吸血鬼だよ」

少女の鼻の頭にできた赤い水玉を、親指で拭う。その刺激に眉を潜めて、デイエゴの手を押し返した。

「吸血鬼？ アレが？」

「ああ。真正正銘のヴァンパイア」

デイエゴは聖なる物を掲げるようにして、チェーンソウのスイッチを入れた。低い唸り声と同時に、火花が散る。

「夜空を舞い、陽を忍び、闇に乗じて人の生血を啜る——」

「でも！ あ、あれは人じゃない！」

スイッチを切る。少女の顔に、ぐっと自分の顔を近づけた。思わず半歩、下がるが、それをデイエゴのチェーンソウが阻む。

「なにか勘違いしていないか？ アイナ・ノーム」

「！……な、なぜ、あたしの名前を……？」

「お前を守ることに、それが私の今回の任務だ。だから、お前の名前は知っている」

少女、アイナは目を丸くした。

自分を守る？

「じゃ、じゃあ、こんなことになるって知ってたんですか？ どうしてもっと早くきてくれなかったんです？ アナタがもっと早くき

てくれてさえいれば、みんなだつて、襲われる前に逃げ出せたのに」  
歩き始めたデイエゴに追いつき、アイナは言った。その言葉は  
デイエゴを攻めるといふよりも、ただの疑問だったようだ。

「さっきも言ったはずだ、アイナ・ノーム。私の任務はお前の護衛にある」

「……だ、だから？」

不吉な予感が脳裏をよぎったが、それはあえて無視してアイナは  
続きを求めた。

「他の村民は護衛の対象ではない。だから、お前の盾になってもら  
うことにした」

「——え……、な、なに？ 盾？ はあ……？」

間の抜けたアイナの言葉になんの反応も示さず、デイエゴは歩く。  
硬いブーツで丸い肉塊を蹴つてどかすと、言葉が続けた。

「発生した吸血鬼は複数だ。幾ら私でも一対多ならともかく、多対  
多の場合、彼らを守ることなどではしない」

「だ、から……？」

声が震える。脳裏をよぎった不吉な予感は、予感に過ぎなかった  
ものはすでに、アイナの理解をこえる規模であった。

「だから、ひとまず彼らを使って奴らの動きを止めることにした。  
この時間帯は、炭鉱の終わりだ。村民のほとんどが屋外で過ごす。

お前の場合、その病弱な体のお陰で屋敷内にいたわけだが——」  
振り返ったデイエゴの顔を、思い切り殴った。巻きつけていたコ

ートの重さが腕にかかり、サングラスが瓦礫へと飛ぶほどの威力で  
あった。

肩で息をし、デイエゴを睨みつける。

「だから、あたし以外の人を、お、——殴にしたって言うの？ み  
んな、みんな——助かったかもしれないのに！」

「……なにを怒る必要がある、アイナ・ノーム」

改めて見上げたデイエゴは、ひどく大きく感じられた。黒い長髪  
に、細長い体がそう見せているのかもしれない。それでも彼女が長

身であることに変わりはないが。

ディエゴは、意味がまるでわからないというように、冷めた目でこちらを見下ろしている。細い柳眉に蒼く鋭い眼光、しかし眠たげにやる気のないような——そんな目だ。

「お前は村民と、それほどの交友関係はなかったと聞いている。生まれついでその体だ。家に閉じこもっているお前を、彼らは悪く言ったそうじゃないか」

「やめて。死んだ人たちを、悪く言わないで」

「事実だ」

小首をかしげ、ディエゴは告げると踵を返した。

そんなディエゴの態度に、アイナはなおも言い募ろうとする。しかし、視線の先にあるものを見て、絶句した。

「……驚いたな。まだ満腹じゃないのか」

一見すると産まれたばかりの子犬のように見えたかもしれない。しかし赤黒いそれは、皮を剥いだ猿のようだ。猿に見えれば、すでにそれが人間だと、人間であつたものだとわかつた。

仰け反つたまま倒れこんだように、なぜか手の甲で体のバランスを取りながら這う、奇怪な人間。その首からは、金色の鎖が垂れ下がる。

「ま、さか——ユゼル？……あ、そ、そんなッ……」

ひきつけを起こしたように浅い呼吸を繰り返す。そんなアイナを肩越しに振り返ってから、ディエゴはチェーンソウのスイッチを入れた。同時に、本体から真っ直ぐな柄が伸びる。

「誰だか知らないが、とつと消えてもらおう」

明らかに無理のある体勢で伸び上がるように跳躍し、ディエゴの頭上を越え、アイナへ迫る。

アイナは恐怖した。目の前の異形のそれでなく、目を大きく見開き凄絶な笑みを浮かべて振り返つたディエゴに。

アイナの目と鼻の先ほどの距離でそれを縦に切断する。豪風がシヨートヘアの髪を流し、飛び散つた血がアイナの顔面といわず髪と

いわず降り注ぎ、肉片と同時にその服を濡らした。

「……あ、あ……」

「油断するなよ、アイナ・ノーム。こいつだけじゃない……餌に釣られたみたいだ」

両手に剣のように構えたチェーンソウ。轟音を両手に持ち、すでに元通りの、やる気のなさげな顔へと戻ったディエゴは、周囲へ目を走らせた。

異様な静寂が、辺りを包む。実際には、音がなくなったわけじゃない。だが、これは——死の気配だ。

「どうやら喰らったのではなく、“仲間”に引き込んだようだな——どうりで……」

この有様だ。

暢気とも取れるようなディエゴの口調に、アイナは震えた。彼女の指示に従い、目を閉じて耳を塞ぎ、縮こまる。アイナの動きを皮切りに、風が動いた。

荒い鼻息と唸り声。近づくと同時に悲鳴となり、鋼の擦れる音が不愉快に鳴り響く。

（獣だ……この人が、血につられた獣を退けてくれてるんだ……それだけ……それだけ……！）  
それだけのはずなのに。

この哄笑はなんだ——なんだと言うのだ。襲い来る獣を斬り捌き、貫き、それだけでは飽き足らないとでも言うかのようなこの笑い声——、感情をあまり見せないこの女の、本当の姿を曝け出しているような。

守護することが任務だと言っていたが、彼女の口に出した“ハンター”という言葉。まるで快楽を貪るために獲物にかぶりつく狩人そのもの。獲物の思考など考えもしない、むしろ読めるならばそれすらも計算に入れて——

（——私を、餌にして……？）

頭の上に落ちてきた物に、アイナは悲鳴をあげて顔をあげた。そ

の鼻先を血飛沫を撒き散らしながら横切る、轟音の刃。

血に塗れて思わず硬直する少女の視線の先にで、ディエゴは退屈そうな顔で鋸を地に衝き立てる。空いた手で上着の胸ポケットからシガレットケースを取り出し、煙草を一本、口にくわえる。なんのことはない、ただそれだけの動作だ。

優雅とは言えないが、流れるような自然な動作で、女は顔をしかめるようにしてくわえた煙草に火を点ける。

どこにでもあるような映であつた、血に汚れた姿でなければ。彼女の周りには、まるで異常者が屠殺場で遊んだように、大小様々な肉塊が散らばっている。原型を留めた物も、留めていない物も——  
「ふうー。そろそろ……いい頃合いだろうな？」

煙を吐く。

虚ろな目をこちらに向けるアイナに歩み寄り、彼女が腕に巻いていたコートを剥ぎ取って頭から被せる。

そんな彼女の後ろに、下卑た笑い声をあげながら一人の男が近寄ってきた。ディエゴはぼろ布のような服装の男に冷たい目を向けてくわえていた煙草を捨てる。

「こんばんは、狩人がぶれの女狐さん。いやあ……いい天気だねえ……」

男の言葉を見殺して、ディエゴは鋸を抜く。ぶさ下がった両手に鋸を持ち、言葉を返すつもりは毛頭ないと刃を回転させる。

男はおどけて怯えてみせたが、まるで反応がないことが面白くなかったように唾を吐いた。

「おい姉ちゃん。俺はこいつらみたいな出来損ないじゃあない。本物だぜ？俺にそんなもので挑むのかよ」

「安心しろ吸血鬼かぶれ」

ディエゴの言葉に、男は顔をしかめる。

「お前の体は今ここで、解体される——いい心地だぞ、身を引き裂かれるのは。生きていようが死んでいようが構いはしない。ただただ血飛沫あげてばらになり、自分がなんであつたか覚えていら

れないほどに細切れにしてやろう。そうすれば、本物だの偽者だの、大差なくなる」

「……おもしれえじゃねえの……姉ちゃんさ……!」

歯を見せて笑う。闇夜に照らされて笑ったのはどちらか――

跳躍して蹴りを放つ男に、ディエゴは鋸を組み合わせて弾き返す。地に降り立つと同時に回し蹴りを繰り出した男の脚を、ディエゴは素早く薙ぎ払った。

切っ先に触れただけで、馬鹿げた量の鮮血が噴き出す。バランスを崩して倒れこんだ男へ鋸を衝きたて、縦に裂くディエゴ。しかし男は、両断された状態でにやりと笑った。

「!」

自ら体を引き裂くように、縦に割れた半身が持ち上がり手を伸ばす。伸ばされた指先は彼女の頬を掠めて血を流した。

「……んん……いい味だあ」

男は手についた血を舐めて、もう半分の体に重なる。ゆっくりと縫合されるように、切断面がからみつく男の体をディエゴは顔をしかめて見下ろした。

――酷いな。

「一度、死んじまったじゃねえか」

「ならもう一回死ね」

投げた鋸が男の頭を粉碎する。

脳漿を撒き散らして力なく崩れた体――しかし、それほど時を経ず、男の体は持ち上がる。ゆっくりと骨が伸びて、頭蓋骨を形成し、頭が再生する。

男は笑って舌を出した。

「ひっはは、無駄だったの、無ウ駄ア。ヴァンパイア相手に、なんだそれは。祝福もされてない、しかも鉄だぞ？　もう、その武器は駄目だ。俺の血をたらふく吸って、俺の支配下にある」

男の言葉に、ディエゴは晒う。ならば試してみるか、冷ややかな笑みが――目を大きく見開いて、踏み出す。

へらへらと笑う男の胴体を横に一閃して蹴り倒す。千切れて吹っ飛んだ男の体——だが男は堪えないと笑い声を大きくするだけだった。——が、それもすぐに止む。

「……ん、んん？　なんだ……体が……」

「ヴァンパイアと言うのは」

硬いブーツの足音を響かせて、ディエゴが男の体に近づく。片手に鋸をぶら下げて、地面に転がったもうひとつも拾い上げる。

「自らの血液に“支配域”があり、それらを含ませた鉄を武器とするらしいな？」

「……ああ、そうだ。だから、その鋸はもう、両方とも使えないぞ」  
「——が、その支配権は先駆者の能力が優先される」

ディエゴの言葉に、男の顔から笑顔が消えた。目を見開いて、恐怖したように女を、そして自分の体を見下ろす。

その姿に端正な顔を醜く歪めて、ディエゴは笑う。

「き、貴様ツ、それ、それは……！　お前は——！」

「ああ、そうだ……そうだよ名も無きヴァンパイア。貴様の同胞の血をたつぷりと喰らったこの刃は、すでに支配者など存在していない。誰にも支配されない、誰にも御せない刃だ。そして、貴様の体は同胞の血によって力も出せまい、余裕を見せて毒を喰らった訳だ」

男が獣のように吼えた。怒りに顔をどす黒く変色させる。その顔を見下ろして、ディエゴは口元を鋭く歪めた。持ち上がった唇から鋭い犬歯が顔を覗かせる。

唸る刃を高々と振り上げて、哄笑をあげる。

「さよならだヴァンパイア。そろそろこの刃も換え時だ、次はお前の血を使わせてもらう」

「薄汚れた血の女がアアアア！」

——いい言葉だ。

女は無情の一撃を振り下ろした。

少女は暗がりの中で目を覚ました。一体、いつから眠っていたのか——なにか、嫌な、とても怖い夢を見ていた気がする。しかし、今は怖くない。いつもならばそんな夢を見れば、怖くて身動きも取れなかったはずなのに。

(……歌……?)

どこからか聞こえてくる歌。涼やかな歌声の中に、どことなく暖かさを感じる。この歌のお陰で自分は恐怖に苛まれなかったのだろうか。

寢床から身を起こして、そこでようやくここが自分の部屋でないことに気づく。見たことのない天井に驚いたが、なにも不安を感じない。

一筋の光りの漏れる場所——闇が縦に裂けて、ドアから光りが漏れているんだとアイナは思った。歌もそこから流れているようだ。少女はベッドから抜け出してドアに近づく。多少、躊躇いつつもゆつくりとドアを押すと、そこには数本の火の点いた蝋燭が立てられた机が中央にある、小さな部屋だった。

その机に腰を下ろして、長い髪が揺れている。上にはなにも着ていないのか、蝋燭に照らされて白い肌が闇に浮かんている。思わず見とれてしまったアイナに、歌を中断して振り返る。

「起こしたか。悪いな」

「い、いえ……」

振り返った女の顔にアイナは息を飲んだ。ディエゴ——名乗った名前を思い出し、気を失う前の光景までまざまざと思い出された。

哄笑をあげて、異形の者を喜々として屠るその姿。震えだした少女に、ディエゴは抱えていたギターを椅子に置き、それにかけてあった自分の上着を取って彼女に放る。

目を丸くする彼女の前で恥ずかしげもなく肌を露出しているディエゴに、少女は慌てて目をそらした。不器用な心遣いであるが、いつの間にか震えの止まった体を不思議そうに見下ろす。

「まだ夜だ。これから先、長旅になるだろう——今はゆっくり休め」  
「……長旅って……これから、どうなるんです？ どうするんですか、私は」

本部に連れて行く。それが私の受けた命令だと、ディエゴ。アイナは恐る恐る、村がどうなったのか聞いた。

「あの村の生存者はアイナ・ノーム、君だけだ。後は私が処分した」  
「……しょ、処分……」

「ああ。今頃は私よりも更に下位の連中が、死体の片づけやらなにやらに、躍起になっているところだろう」

煙草を取り出しながら、事も無げに言い放つ。アイナは、この女が本当にさきほどまで歌っていたのかと目眩すら感じた。

そんな少女に構うことなく、言葉が続ける。

「ここはあの村から離れたホテルだが、すぐに襲撃が来るとも知れない。朝一でここを立つ」

「襲撃——？　なんで、……私が狙われているんですか？」

震えだした少女の体に、自分のコートも被せようとするが、それはアイナが制した。睨むようにこちらを見上げるアイナを、冷たい目で見下ろし、私はなにも知らされてはいないが、とディエゴは口を開く。

蠟燭の乗った机に腰を下ろし、ようやくワイシャツを着た。今まで裸に近い状態であった女に改めて気づいてアイナは顔を赤くする。  
「奴らは人間を餌としてしか考えていない。だから襲撃を受けてもあんな事態に陥るはずがないのだが——」

“餌としてしか見ない”——その点ではこの女も、ヴァンパイアと呼ばれる存在と同質だろうと、少女は首筋が冷えるような感触を覚えた。

「餌として扱われた人間はいなかった。おそらくはアイナ・ノーム、君を探すために下僕を増やしたんだろうな」

何故、自分を——

胸元に抱いた女のジャケットを強く抱きしめる。ディエゴは少女

に、もう寝るように言った。

「じゃあ……また、歌ってください。眠れるまで」

恥ずかしそうに言う少女に女は笑うでもなく、了承する。アイナの寝室で彼女が横になるのを見てから、ギターの置いてある椅子ごと彼女の部屋に移動する。

微笑みかけることもなく、目を閉じた少女の横でディエゴはギターを弾き、歌い始めた。

（後書き）

いかがでしたか。なんか無駄に長くなったような気もしないではありませんが……。

元は長編用に執筆していたのですが、パソコンの調子の悪さに泣く泣く短編投稿です。他にも仕上げていないお話などがあって、夏休み中に終わらせるつもりが……むしろ夏休みにパソコン触れないってそんな。

これからも色々と投稿したり更新したりしますので、機会があればまたいつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0876i/>

---

D I E G O

2010年10月8日15時30分発行